

足立史談

第579号

2016年5月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
(28-308)

江ノ島青銅鳥居に刻まれた「大千住」

おおせんじゅ

当館では、五月二二日まで、文化遺産調査特別展「美と知性の宝庫 足立―酒井抱一・谷文晁とその弟子たち―」を開催中である。展示準備の最中、足立史談会の矢沢幸一朗氏から、江ノ島に酒井抱一の作品があること、そして、千住の住人が奉納した鳥居があることなどを教示頂いた。この情報が展示に関係する

可能性が高いことから、二月四日に江ノ島で筆者が調査を行った。江ノ島大橋を降りてから五分程で、眺めながら橋を渡ると、すぐに大きな鳥居が見えてくる。江ノ島の入り口にふさわしい立派な鳥居である。鳥居をくぐった先には、今回の展示で大きく取り上げている絵師・船津文洩が嘉永四年に江ノ島詣での際に宿泊した恵比寿屋も現存している。さて、この鳥居は、もとは木

製のものであったが、寛保三年（一七四三）に倒壊したことを機に、延享四年（一七四七）に青銅製の鳥居が奉納された。現存する鳥居は、文政四年（一八二二）に再建されたものである（藤沢市指定文化財）。左右両方の柱には、二百八十人程の人名や組織名が刻まれている（延享四年の奉納者約三十人含む）。奉納者の地域的分布は、武蔵国を中心に関東一円に及ぶ。当時の江ノ島は、単なる信仰の場に留まらず、風光明媚な観光名所であり、庶民の娯楽の場となっていた。さらに、名だたる文化人が数多く訪れる文化的な場所でもあった。その一例として、矢沢氏のご教示どおり、奥津宮には酒井抱一が奉納した「八方睨みの亀の絵」（藤沢市指定文化財）が伝来している。また、奉納者の中には、浅草で高級料亭を営み、酒井抱一や谷文晁からも最良にされていた八百屋善四

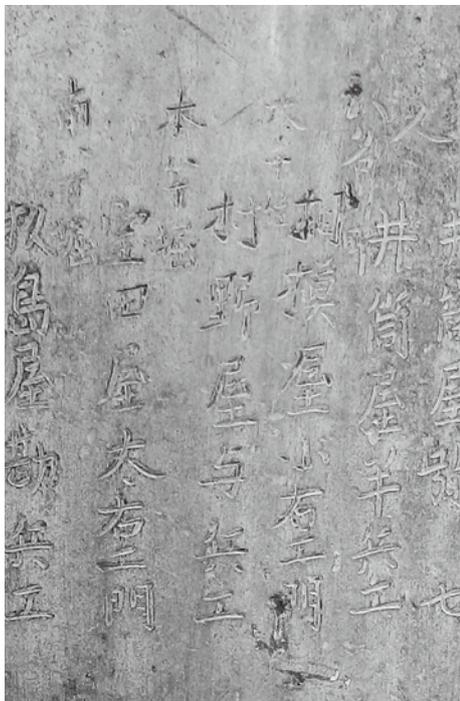
郎の名前もあった。八百屋善四郎は、酒井抱一に絵馬の作成を依頼し、西新井大師に奉納した人物である。他にも、吉原の妓楼の楼主など多岐にわたる人物の名が見えるが、この中に千住の奉納者を確認することができた。その部分を拡大したものが掲載した写真であり、少しわかりにくいのが、写真中央には次のように刻まれている。

大千住

村野屋与兵衛

江戸時代の千住宿について詳細を知ることができる資料に「千住宿宿並図及伝馬割図」（織畑家文書）がある。しかし、この資料に村野屋の名は見えない。この資料は、街道の東側だけを詳細に描いたものであるから、村野屋は街道の西側にあったものと推測される。そして、昭和五十二年に足立区教育委員会が刊行した「旧日光道中千住宿家並変遷図」の明治年代の様子を見ても、村野屋という店は確認できない。したがって、村野屋は幕末から明治初期にかけて、廃業したものと思われる。現在のところ、村野屋については何も明らかにはないが、鳥居奉納当時の村野屋与兵衛は、千住の富裕な商家だったことは間違いないだろう。千住の商家が、遠く江ノ島の文化事業にまで金を拠出していたことは、注目すべき事例である。

上 江ノ島青銅鳥居全景
下 江ノ島青銅鳥居 左柱 部分拡大
(平成28年2月4日 神奈川県藤沢市 江ノ島にて 筆者撮影)



とところで、この資料は思わぬ副産

物をもたらした。当館では、平成二十五年度に「大千住展 ―町の繁栄と祝祭―」と題し展示を行い、同名の図録を刊行した。展示のタイトルに用いられている「大千住」という呼称について、多田学芸員は(同図録「展示概論 近代千住の江戸文化 ―近郊都市の志向性―」、明治十六年(一八八三)の読売新聞の記事に登場するのが初見として、しかし、今回の調査によって、その初見が六十三年も前の江戸時代にまで遡ることになったのである。

大千住の呼称は、江戸時代の宿駅制が廃止され、近代化していく中で急激に拡大していく千住を代表する言葉と指摘されている。しかし、今回、宿駅制の機能している時代から使用されていたことが明らかとなった。千住宿は、掃部宿や小塚原町・中村町などが加宿され、宿域が拡大してきた歴史を持つている。したがって、大千住の呼称は、近代化による千住の拡大を代表する呼称というよりも、むしろこうした江戸時代以来の千住宿の宿域が拡大してきた歴史を反映する呼称だったと言える。そして、それが近代における千住の拡大の中で、図録が指摘するような意味をも持つようになったと考えられる。

大千住という呼称は、千住の拡大の歴史を物語るものだったのである。(郷土博物館専門員 佐藤貴浩)

文淵の日記から(二)

絵師たちの交流 ・画本の貸し借り

郷土博物館

船津文淵の日記からは、谷文一(二世)はもちろん、文淵が他の絵師や同じ趣味を持つもの同士で、たびたび画本類を貸し借りしている様子が見え、うかがうことができます。

「菜菴雑記 卷三」

【一】嘉永6年

4月

同十五日 曇南風時々小雨

一、自分朝圭明方へ繪巻物かり二行昼頃帰宅

(中略)

5月

同七日

一、自分出府朝圭明立寄繪巻物かへし松魚節二本そへ遣ス

同同伴深川六軒堀繪のくや江繪具求二行(後略)

【二】では、圭明という人物へ繪巻物を借り、三週間ほど過ぎて返した記述があります。また、返す際に、鰹節を二本謝礼に添えたこと、さらに一緒に深川六軒堀の絵具屋に絵具を買いに行ったことが記されています。圭明とはおそらく関屋圭明という千住在住の絵師であると考えられます。

す。関屋圭明については、詳しくは不明ですが俳画が遺されています。

「菜菴雑記 卷三」

【二】嘉永6年5月

同九日 天気

一、朝自分出府鈴木文四郎へ行

すきかへし壹把持参

当日一日咄文海参り、酒肴出油

古文一屏風牧童図借用泊柳川亭

夜和泉橋通り宮田近辺出火有之

八ツ頃ほとなくしめり文四郎帰

(中略)

同廿九日 天気

一、自分朝出立折戸江参り香奠百

正持参酒飯出

ル七ツ時より宮田文四郎へ屏風

繪かへし主人留主故

野村へ鳥度行同夜文四郎方へ泊

【二】では、5月9日に、すき返し紙を持って鈴木文四郎を訪ね、「古文一」の牧童図屏風を借りています。文四郎は、どうも居住地から、下谷、宮田文四郎とも記されており、画業に關わる記述が多く見られる人物です。文海という名前も見られます。

「古文一」とは、天折した一世文一を指すものでしょう。そして、29日の「宮田文四郎へ屏風絵かへし」は、この牧童図で、「菜菴雑記 卷二」の末の「嘉永六癸丑年春正月ヨリ書画出来之記」の五月の項に、「一、牧童

屏風六枚模 自葺」と記載があり、

他のものと異なり、自身のために写したことがわかります。

「菜菴雑記 卷三」

【三】嘉永七年

二月

十七日 天気

一、朝皿沼同伴發到市川其二宅

酒出寫物借用其谷立寄夕刻帰

(中略)

四月

同廿五日 四ツ頃より雨降出し

一、自分皿沼早朝出来市川其二方

画本相帰候

【三】では、2月17日に、おそらく皿沼(足立区)にいた文舟を同伴し、市川其二へ、「写物」を借用に行っています。そして、25日に画本を返しています。市川其二とはどのような絵師でしょうか。琳派の絵師鈴木其一の弟子である市川其融の可能性もあります。そして其谷とは？

まだ不明な人物も多く登場し、研究の進展が期待できます。それにしても画本や絵巻を借用の際に、酒肴で長く一緒に過ごしたり、(話が盛り上がって?) 絵具を買いに行ったりと、親しく付きあっている様子がうかがえます。また、同門流派を越えた交流があることもわかります。前回の、絵画の土用干しと同様に、画を学び愉しむもの同士の親交の場面が浮かぶようです。

沼田船津家第七代 船津久五郎(文測)に連なる人々(三)

伊澤隆男

沼田船津家は、三代が養子相続して七人の子をもうけたが、長男の金重郎矩美が芸者に夢中になり、そのことで四代目を相続することができず、末子の金松が四代目を継ぐことになった。五代、六代は金松の長男と次男であるが、ここでも波乱が続くことになる。

五代 船津徳次郎重親

四代金松の長男で、船津久五郎(文測)の父である。徳次郎は四代金松の長男であったが、後述するように、すんなりと沼田船津家を継がなかった。文化八年(一八一二)八月没。行年二十七歳。生年は天明四年(一七八四)、徳五郎ともいう。初名は源二で、後に徳次(五)郎。号は大江亭行野。「和歌を好み、花、書も又巧なり。・船津輪助記」

妻 糸子 竹塚村河内久蔵政武娘

徳次郎夫婦は三代目の次男徳之丞が婿となった上沼田の清水家に夫婦養子で入った。しかし清水家の姑(清水利助の後妻つる・しんやから清水家の後妻となる)と徳次郎の妻、糸子の折り合いが悪く、結局夫婦で清水家を追い出され、船津家の五代目を継ぐことになる。沼田船津家と清

水家は行ったり来たり縁戚関係があるようだが、この清水家も上沼田の名家で、明治の初年上沼田村の名主堀内家の次男謙吾が養子となり、初代江北村長となっている。

徳次郎が清水家を離縁されて戻ってきたとき、四代目の金松は四十三、四歳の働き盛りであり、家督を譲る歳ではなかったが、長男に譲ったものと思われる。徳次郎が戻ってこなければ三男の亀之進が成長するまで待つつもりだったのかもしれない。

文測(七代)は清水家で出生し、両親が清水家を追い出されて、父徳次郎が五代目を継ぐことになったので、短い間、沼田の船津家において、父が若くして亡くなった後、母の実家、竹塚村の河内家で育つことになった。文測の母糸子は、さらに相森神社(すぎのもりじんじや・中央区日本橋堀留) 神官小針織部常直の後妻として嫁ぐことになった。常直について小針(こはり)家に以下の家伝がある。「幼名彦太郎、後、織部改、隠居シテ外記改…。(織部の前妻) 休昌院ヲ葬、其後、武州竹之塚村名主十一代河内久蔵政武長女、糸ヲ妻トス。弘化四丁未(一八四七)年六月中隠居シテ、外記ト改。嘉永

三庚戌(一八五〇)年二月十五日、妻死壽六十四歳。安政五戊午(一八五八)年八月二十七日没壽七十三歳」

河内家と小針家は共に小田原北条氏の家臣であり、北条氏直に仕え、北条家が滅びたのち、河内家は竹塚村に土着し、小針家は相森神社の神官となり、両家とも一族が旗本となっている。

子 一、久五郎(文測) 父徳次郎が死んだとき六歳だった。この後、久五郎は、母の実家河内家で、船津家の七代を継ぐまで十九年間過ごす。画はおそらく祖父久蔵が谷文晁となんらかの關係があつて学ばせたものと推測する。

子 二、金次郎 文測の弟。文政十年(一八二七)六月四日没。小林氏の養子となり小林友栄という。下谷山下町住。

五代目となった徳次郎が二十七歳で亡くなったとき、その子、久五郎は六歳、四代金松の三男亀之進も八歳だったので、四十七歳だった金松が隠居の身で家政を取り仕切り、亀之進が十八歳の頃(文政四年)に、六代目としたものと思われる。

六代 船津徳右衛門重正(亀之進) 四代金松の三男。文政十一年(一八二八)九月十日没。行年二十五歳。



女の縁返しに、登門を送り、茂右衛門(徳右衛門)に嫁入り、あて取に嫁入り、右衛門の受取に、徳右衛門の嫁入り、船津家の縁取に、船津家の縁取に、市道と茂登女、喜入った(船津家の縁取に、市道と茂登女、喜入った)

生年は享和三年(一八〇三)。初名亀之進、号は左卿。和歌俳諧を好み、茶は石州流を学ぶ。文政八年

小作米百二十三俵

手作米十三俵五升 餅二俵三斗

妻 ルイ子 鳩ヶ谷宿本陣十代目船戸喜市の次女。茂登女(もとめ)改。鳩ヶ谷宿本陣十代目の船戸喜市の子どもは八人いたが、それぞれに夫が亡くなったり、離縁されたり、後妻になつたり、ということが多かったようである。次女と四女は沼田の船津家の嫁となり、五女は里の船津家に嫁いでいる。

茂登女は二十歳前後で六代の船津徳右衛門(初名、亀之進)に嫁すが、一子半重郎(八代)を生んだ後に離縁されている。離縁された理由は、地元の役人と仲良くなつて駆け

落ち出奔したものとと思われる。このことは一切表面化されなかったようだが、六代の亀之進が文政十一年に二十五歳で亡くなり、さらに文政十三年に四代金松も亡くなって、河内家にいた久五郎が第七代を継ぐこととなった。

七代 船津徳右衛門重許(久五郎・文測) 文化三年(一八〇六)生。文政十三年(一八三〇)八月二十四日、二十五歳で家督を継ぐ。

「重正死したればなり。初名久五郎(久五郎の名は祖父久蔵の久の字による)文測と号し画を善くす。谷文晁の高弟。書も非常に巧み。非常に近眼」五代徳次郎倅。

文測という号は文政九年(一八二六)八月二十三日二十一歳の時に文晁よりもらう。輪聖院雲漢梵清居士。安政三年(一八五六)九月十二日没。行年五十一歳。



文政9年正月、船津久五郎21歳(文測の号を授けられる前) 大根図
上の書は谷文晁「日本名山図譜」序文

は、たった一人いた祖父の金松が亡くなる。(金松の後妻尚子は文政三年にすでに亡くなっていてる。)文政十三年に船津久五郎が沼田船津家七代目として入る。このとき久

妻 伊曾女(いそめ) 鳩ヶ谷町本陣十代船戸喜市四女。文化五年(一八〇八)生。寶照院清山浄海大姉。行年五十二歳。天保九年に三十一歳。最初は本所瓦町中島彦右衛門に嫁し三人の子をもうけ、夫が亡くなり離縁される。文測が前妻と離縁した後(縁付く。天保四年(一八三三)十二月二十七日婚礼。久五郎二十八歳、伊曾女二十六歳。

この結婚はおそらく里船津家の五代助八(船戸助右衛門仙圃・御徒歩組与力羽鳥助五郎の次男)あたりが関わったのではないかと推測する。竹ノ塚の河内家はもともと侍の血筋であり、助八も武士の出なので、話に通じるのではと考える。

本陣十代の喜市が亡くなったのは沼田船津家の金松と同じ文政十三年であり、その頃里の船津家は五代の助八が五十三歳であり、助八の長男政三郎は喜市の五女、美智女を嫁に

迎えている。鳩ヶ谷宿本陣十一代の恵助は十四歳なので里の助八以外に、本陣や沼田の縁をとりもつ人はいなかったのではないかと考える。安政六年(一八五九)十一月二十日没。久五郎との間に子どもはない。養子とした亀之進の一子、半重郎(船津徳廣)が八代となる。

天保九年(一八三八)石高 五十八石六斗二升三合

八代 船津徳廣(半重郎)

文政六年(一八二三)六月十四日夜五つ時生まれ。明治二十七年(一八九四)十一月三十日没。華嚴院葉散道保居士。行年七十二歳。

船津徳廣は六代目に嫁いだ本陣十代目船戸喜市の次女茂登女の子として生まれたが、もの心のつかない三歳の頃(文政九年)に母が出奔し、五、六歳のときに父徳右衛門重正が亡くなり(文政十一年)、七歳のときに



八代目 船津徳廣

五郎は二十五歳、徳廣は七歳である。徳廣は長じて里の船津家との行き来を密にし、助八の子の里船津家七代の徳助の次男船津静作を婿養子に迎えている。

妻 てる 本所中の郷瓦町中島彦右衛門次女。高台院白蓮園証大姉。七代目久五郎・文測の妻、伊曾女は実母。弘化四年(一八四七)一月二十九日婚礼。明治十四年(一八八二)六月十二日没。行年五十二歳。

子一、亀子 弘化五年三月二日卯上刻生まれ。嘉永二年六月二十日辰下刻没露清童子。早世二歳。

この物語に登場する船津家(船津家、船戸家)の人々は全て、鳩ヶ谷宿本陣初代、船戸大学の血筋の人々であり、船津家(船津家、船戸家)には実はまだまだ沢山の物語があるが、沼田船津家の代々の当主を巡る記述はいったん筆をおくことにする。

(川口市郷土研究会会員) (終)